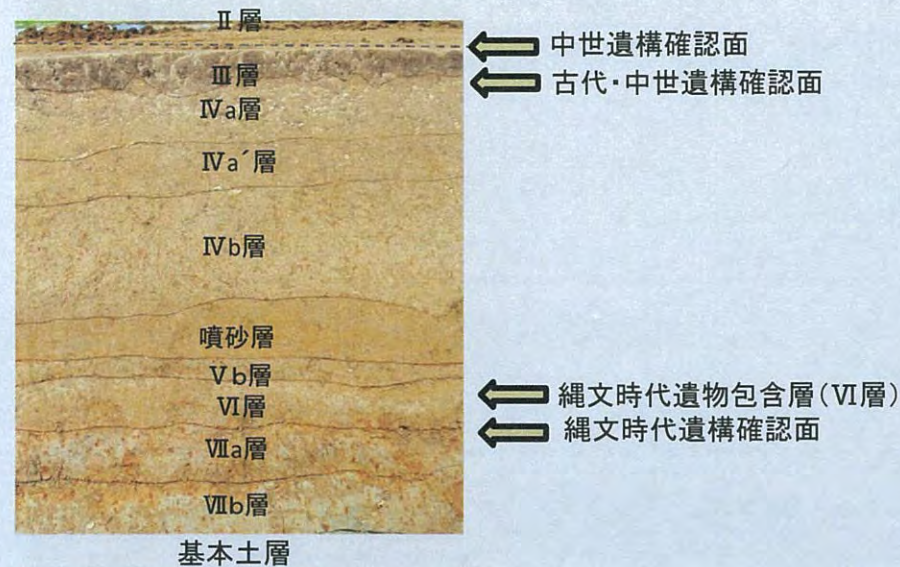


1.はじめに

山口野中遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地の自然堤防に立地し、現代の水田面の標高は約6.4～6.8mです。一般国道49号阿賀野バイパス建設工事に伴い、平成24年度に続き、平成25年4月から2度目の発掘調査を行っています。これまでの調査で、縄文時代・古代・中世の遺跡が見つかっています。調査面積は、中世面（鎌倉時代：14世紀前半・3,759㎡）、古代面（平安時代：9世紀前～中葉・5,616㎡）、縄文時代面（5,482㎡）の延べ14,857㎡です。

現在は、縄文時代の面（縄文時代晩期：約2500年前）を調査しています。遺構は、竪穴建物1基、土坑4基、焼土・炭化物の集積48か所、埋設土器3基、ピット18基、土器の集中域28か所などを検出しました。遺物は土器・石器などが出土しました。

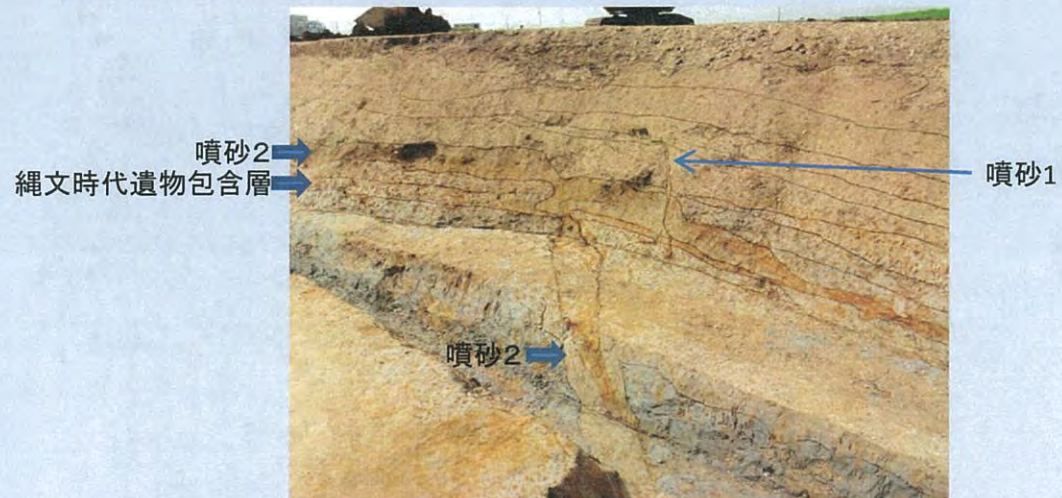
2.基本土層と遺構確認面



調査の結果、縄文時代・古代・中世の遺構・遺物が層位的に確認されました。古代・中世の遺構は、現代の水田面から約40cm～70cm、縄文時代の遺構は、約1.3～1.7mの深さで検出しています。

中世面の遺構は、井戸・土坑・溝などを検出しました。井戸・土坑は、昨年度検出した掘立柱建物の付近に位置しています。古代の遺構には、土坑・溝・ピットなどがあり、調査区に点在する形で見つかりました。

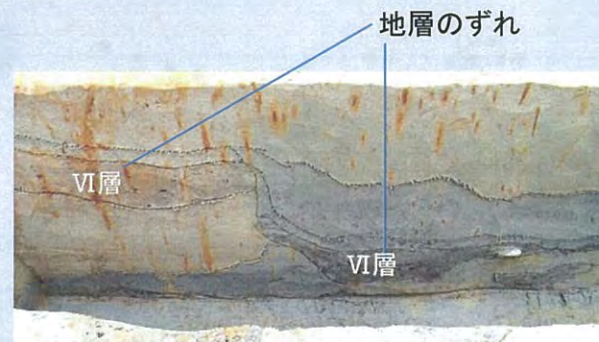
3.地震の痕跡



液状化の様子

調査区内では、地震により液状化して砂が噴出する噴砂の痕跡が認められます。土層断面の観察から、調査区は縄文時代晩期以降、少なくとも2回の地震に見舞われていることがわかります。噴砂2は、縄文時代晩期の層を切っていること、噴砂1は中世面のII層を突き抜けないことから、地震は縄文時代晩期以降、中世の間に起きたものと考えられます。

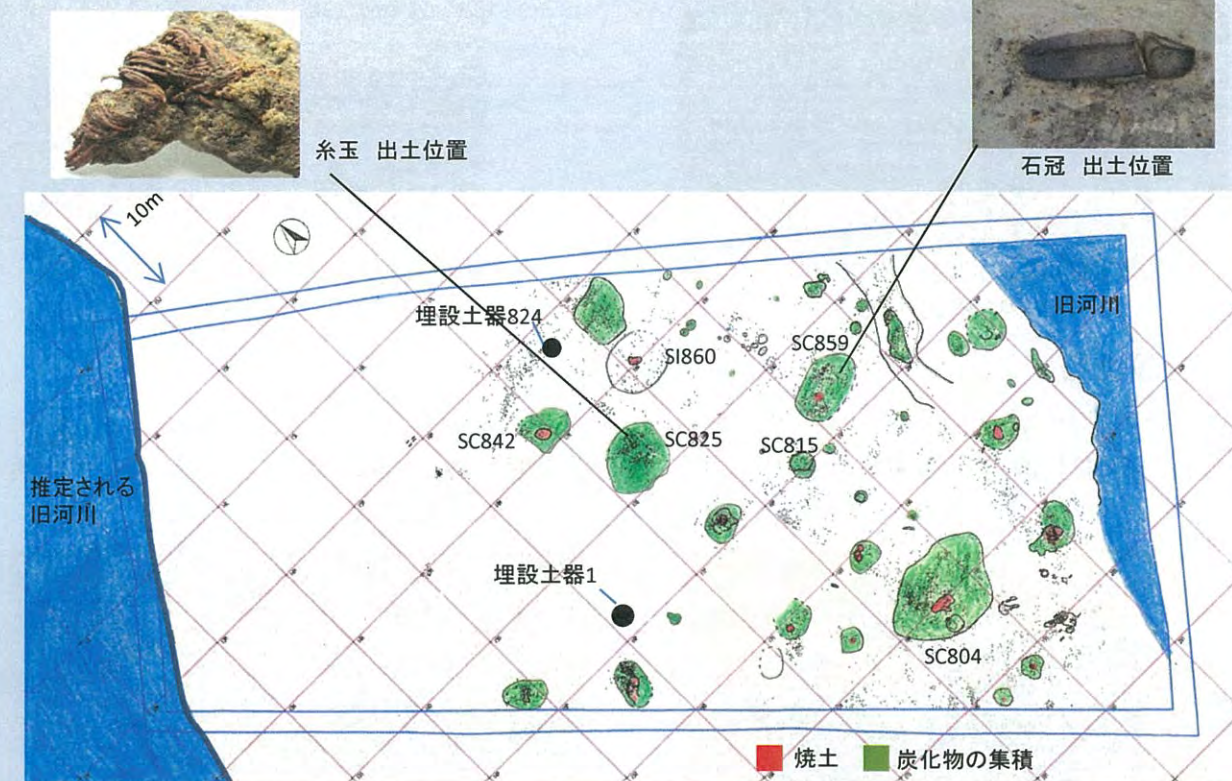
このほか、土層が上下方向にずれる断層の痕跡も確認されました。



断層の様子

4.縄文時代の地形と遺構

縄文時代の地形は、調査区南側は微高地となっており、北東・北西方向へ向かって緩やかな斜面を形成し、北側は低位面となっています。微高地は標高約5.7m、低位面は標高約5.1mとなり、約60cmほどの比高があります。また、東側では縄文時代層を切る河川跡を検出しました。土層断面の観察などから、東側では縄文時代の頃にも川が流れていた可能性が考えられます。また、北西側においても急激に落ち込む土層の堆積状況から、旧河川の存在が推定されます。これらは、土層の堆積状況から南北方向に流れていたことが推定され、この両河川に挟まれた微高地と低位面も南北方向に延びていたことが考えられます。遺構はこの微高地・低位面につくられており、遺跡は調査区外の南北方向へ広がるものと推定されます。



遺構全体図(1:800)

a.竪穴建物(SI860)

平面形は直径約6mの円形で、深さは約20cmあります。中央付近には、赤く焼けた土と多量の炭化物があり、炉跡と考えられます。柱穴は4基見つかっており、約20×20cm・深さ35cmの円形に掘られています。

また、床面直上は炭化物層に覆われており、多量の土器・石器が出土しました。



SI860 炭化物検出状況



SI860 遺物出土状況



土器出土状況